

小型仿製鏡をめぐる考古学的研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期 人文学専攻

D064627

脇山佳奈

本論文は、古墳時代小型仿製鏡の古墳時代社会における役割を解明することを目的としたものである。研究史をみると、小型仿製鏡の政治的役割がどの程度であったのかという点に関しては様々な意見があり、決着がついていない問題であることが分かる。小型仿製鏡の中で素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡・内行花文鏡を検討し、さらに土製模造鏡・石製模造鏡と比較することによって、小型仿製鏡の役割の解明を試みた。さらに、小型仿製鏡の断面形態・鈕孔形態・鉛同位体比の分析を含めて、小型仿製鏡の画期を4つに分け、小型仿製鏡の出現から衰退までを論じている。続いて各章の概要について述べることにする。

第1章では仿製鏡の研究史をまとめ、小型仿製鏡の課題を整理し、本書の研究手法の提示を行った。

第2章では、弥生時代後期から古墳時代後期の小型仿製鏡である素文鏡の動向について検討を行った。分類では鼻鈕をもつ素文鏡と円鈕をもつ素文鏡とに大別している。この両者は盛行する時期や出土傾向に相違があることを明らかにした。円鈕をもつ素文鏡は重圏文鏡の流れをくみ、古墳時代前期を中心に盛行する鏡である。この素文鏡は面径3～5cmと非常に小型であることから、面径の大きさは規制を受けていたと結論付けた。分布状況からみると、近畿地方を中心とした分布形態を呈していることから、古墳時代前期に円鈕の素文鏡は大和王権から配布される鏡として製作されたと結論付けた。素文鏡は重圏文鏡や珠文鏡などの小型鏡の中でも面径が最も小さいことから、再下位の鏡として位置付けられたと考えた。一方で、鼻鈕の素文鏡の大部分は、集落・祭祀遺跡で使用されていることに特徴がある。この鼻鈕の素文鏡は福岡県沖ノ島遺跡・奈良県山ノ神遺跡などといった大和王権と強い関係性をもつ祭祀遺跡からの出土が特徴的であり、鼻鈕の素文鏡も大和王権の下で生産されたと考えた。沖ノ島遺跡は朝鮮半島へ向かう際に航海安全を行った場所であり、大和王権の力がおよんでいた場所である。また、淡路島の木戸原遺跡は瀬戸内海ルート上にあり、大陸へ行く際の経由航路である。大和王権の玄関口であったことを考えると、非常に重要な場所であったといえる。大和王権は重要な拠点を押さえていたことを、鼻鈕をもつ素文鏡の出土遺跡からうかがうことができる。東日本においても海上ルートを掌握していた痕跡を、静岡県洗田遺跡、茨城県釜付遺跡にて鼻鈕の素文鏡が出土することからもうかがえると述べた。

第3章では重圏文鏡の出現と拡散を論じた。重圏文鏡は古墳時代初頭の大和王権の統一と共に、広域に分布する威信財であると指摘した。その根拠として、遠距離間で類似する代表的な資料を3面提示した。断面形態・鏡体厚・面径における鈕の比率・鈕孔形態が酷似しており、同一の場所で生産されたことをうかがわせる資料であり、この3面中1面は近畿地方からの出土であることは、大和王権下における近畿地方での生産を推測できる資料といえる。重圏文鏡は近畿で生産された弥生時代小型仿製鏡の生産技術を引き継いでいることも、重圏文鏡が近畿地方で生産され

たと結論付ける要因の一つと考えた。

重圏文鏡は日本列島の各地域で出土例があり、古墳時代前期の遺構から数多く出土する状況を加味すると、古墳時代の初期に権威を付与された鏡として、大和王権下での生産・配布が始まったと考えた。重圏文鏡は古墳時代の開始と共に、大和王権の階層システム作りの一端を担うものであったと指摘した。分布状況をみると、茨城県から宮崎県までみられ、特に、東京湾沿岸、利根川水系、駿河湾、瀬戸内海沿岸、日本海側の鳥取県、九州地方北部において分布が密であり、このような場所は大和王権にとって古墳時代初頭の重要な拠点となる地域であったと述べた。

第4章では珠文鏡の出現について論じた。筆者は珠文の形態からみて、乳状突起をもつ弥生時代の近畿系小型仿製鏡に祖形をもとめた。珠文鏡の編年をみると、中期以降にも新たな文様が次々に生産され続けることを確認した。

前期の珠文鏡は重圏文鏡の分布状況と類似しており、中期になると、それまで分布が密であった地域から、拡大の傾向を示し、その分布は九州地方南部や朝鮮半島にまで及んでいる。また、遠距離間で類似する珠文鏡がみられることを確認している。このことから、珠文鏡も重圏文鏡と同様に、近畿地方で製作され、大和王権によって配布されたと結論付ける。珠文鏡の検討においても、小型仿製鏡は大和王権下における権力構造を反映するものであり続けたことが判明した。

第5章では内行花文鏡の発生と展開についてまとめた。古墳時代の小型内行花文鏡は弥生時代小型仿製鏡と中国鏡の内行花文鏡の影響を受けて出現するものがみられると指摘した。大型と小型の内行花文鏡の単位文様を比較すると、小型鏡の単位文様には、大型鏡よりも中国鏡の四葉座内行花文鏡に近いものを指摘することができる。このことから、筆者は小型鏡が大型鏡に先行する可能性を指摘した。出土遺跡についてみると、先学の研究によって内行花文鏡の大型鏡は、近畿地方の前方後円墳や前方後方墳から数多く出土することが明らかにされている。古墳時代前期の中型・小型の内行花文鏡については、大型の内行花文鏡と同様に前方後円墳から出土する割合が高いことが判明しており、このことから、内行花文鏡は小型であっても、階層の上位に位置付けられる鏡であったと結論づけた。

第6章では青銅鏡を模倣して出現したと考えられる石製模造鏡について検討している。石製模造鏡について、筆者は古墳時代前期後半において小型仿製鏡の影響によって出現していることを述べた。古墳時代中期になると、東山道の終着点と考えられている山形県八幡山遺跡では石製模造鏡を用いた祭祀が行われており、石製模造鏡も大和王権の東国進出に関連するものと考えられる。東北地方での石製模造鏡の流通と時を同じくして、韓半島の竹幕洞遺跡でも石製模造鏡2面が出土する。同時期の東限である八幡山遺跡と、西限である韓半島の竹幕洞遺跡に石製模造鏡がもたらされている。さらに、竹幕洞遺跡の南では七岩里古墳などの前方後円墳が築造されている。一方で八幡山遺跡の南でも坊主久保1号墳という前方後円墳が築造

されている。このことも、石製模造鏡が大和王権と何らかの関係があることを物語ると指摘した。

第7章では小型仿製鏡を模倣して出現したと考えられる土製模造鏡について検討している。土製模造鏡は小型仿製鏡や石製模造鏡と異なり、唯一権威と関わりのない遺物といえる。土製模造鏡の出土範囲は今回取り扱った重圏文鏡や珠文鏡の分布範囲より狭いことを確認した。今まで青銅鏡と土製模造鏡の関係について論じられることは少なかったが、形状から判断すると小型仿製鏡は土製模造鏡に少なからず影響を与えていたと論じた。土製模造鏡が古墳から出土する事例は溝や墳頂に限られており、副葬品とは異なることから政治的な意味合いはないと結論付けた。

第8章では小型仿製鏡の鈕孔および断面形態の分析、鉛同位体比の分析から生産技術の検討を行った。その結果、重圏文鏡は弥生時代から古墳時代への移行期の仿製鏡と結論付けることができた。珠文鏡・内行花文鏡は基本的には古墳時代に流通する華南産の青銅を使用しているが、珠文鏡の一部は華北産と華南産の鉛を混ぜ合わせて使用するなど、鏡式によって使用する青銅に違いがあることを指摘した。当時の小型仿製鏡生産体制の一端を明らかにできたと考える。

第9章では、第8章までの検討結果を踏まえ、小型仿製鏡の画期を第1期～第4期に設定した。各期の説明を行うこととする。

#### 第1期 出現期

近畿地方において大和王権が成立し、近畿系の弥生時代小型仿製鏡の流れを組むものが、近畿地方を中心として小型仿製鏡の生産が開始される段階である。弥生時代小型仿製鏡から流れを組む重圏文鏡や内行花文鏡等の出土が際立っている。これらの鏡の鈕孔形態は円形・半円形を呈しており、この点においても弥生時代小型仿製鏡と類似している。

#### 第2期 普及期

大和王権によって青銅鏡が日本列島各地に配布され、中国鏡や仿製鏡を用いることで身分の格付けを行った段階である。仿製鏡は大型のものも生産され、鏡の面径の大小が重視された段階といえる。

#### 第3期 拡散期

小型仿製鏡がより広範囲に大和王権によって配布されるようになり、珠文鏡は今までに大和王権との関係が密であった近畿地方や瀬戸内海からの出土量が減るとともに、その周辺地域や韓半島南部に数多く配布されるようになる。第3期になると大型仿製鏡はみられなくなり、小型仿製鏡が仿製鏡の中心の位置を占める。大和王権が周辺地域との結びつきをより強固なものにし、より広範囲の勢力を取り込むために、小型仿製鏡を利用した段階といえる。

#### 第4期 衰退期

大和王権による小型仿製鏡に対する政治的役割が消失していく段階である。小型

仿製鏡のもつ政治的役割は薄れ始め、新たな文様の出現は減少の傾向を示す。祭祀的な役割の強い素文鏡は古代まで祭祀具として生産され続けるが、素文鏡以外の仿製鏡は終焉をむかえることとなる。

以上の検討から、古墳時代の各時期において、小型仿製鏡には強い政治的な役割をもっていたことを明らかにできたと考えている。